

異質な文明が遷移・交錯、独特な文化的風土を創生する悠久なる歴史都市・イスタンブール（その1）

文明(文化遺構と歴史物語)の可視化と都市のアクティブ化

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

1. 文明の十字路、世界の架け橋 地政学的優位性がもたらす繁栄

悠久な時の流れの中、時代毎、文化的価値の高い遺構を大地に刻み、魅力的な物語を創んできた世界文明の中心・イスタンブール、この地は時代の文化が順次堆積、その重層性が時に磨かれ、奥深い地の魅力を醸しており、世界中から旅人や商人を集め賑わう、グローバルな観光・商業の歴史都市として存在している。近代に入っても、連合国に占領される中、トルコ革命を成し遂げイスラム世界から唯一近代化に成功、近年は、交通網の充実など都市のアクティビティを高めながら、ヨーロッパ大陸最大の都市圏人口を活かし、経済発展を遂げている。

しかし、この地の本質的な魅力は経済的な発展というよりも、独特の地勢を有する大地の上に、数千年の歴史を重ね刻み込まれてきた人類の文化活動の軌跡にあり、イスタンブールの魅力は異質な文明が遷移・交錯する中、幾星霜を経ても、その輝きを失わない。1985年に悠久な歴史の中に堆積されてきた文化は、**世界文化遺産**として登録された。そして現在、近代都市としての交流基盤を整備し、観光に商業にそして交易にと都市活動は活発化、新たな人間交流の物語を創生すべく、コスモポリタンが多方面で活躍している。

それでは数千年の間、世界文明の中心として、価値ある文化遺構と魅力的な歴史物語を創生し続けてきた、グローバルシティ・イスタンブールの都市創造の軌跡を紹介しよう。まずは、この地の地理的特徴と歴史的沿革についてである。

(1) 独特の地勢 陸路・シルクロード(商業軸)と、黒海と地中海を結ぶ海路(交易軸)の交差点

イスタンブールは、トルコ北西部に位置する歴史都市で、欧亜に跨る地勢上の特性を活かし、観光・商業・交易に優れるグローバルシティとして都市圏人口1,400万人を擁し、いま近代的発展の渦中にある。また、イスタンブールは二千年もの間、幾多の帝国が都を置いた**世界中心**で、ビザンチンの文化遺構やエキゾチックなオスマン建築など、時の流れの忘れ物を求め、世界中から観光客が訪れており2015年には、その数が1,250万人を超えた(世界第5位)。

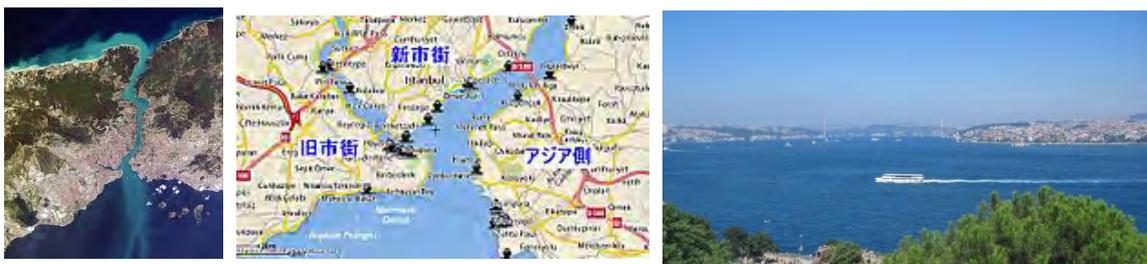
都市の面積は5,343km²で、市域はボスポラス海峡を挟み、バルカン半島を要するヨーロッパ(トラキア)側とアジア(アナトリア)側とに分かれる。この海峡海路、北は黒海から南はマルマラ海を経て地中海まで続いており、今でも黒海のクリミア半島からはロシアの船が、この地を通して中東などへと向かう重要なルートとなっている。

「地方創生」支援プロジェクト



イスタンブールは、マルマラ海の北岸に位置、ヨーロッパ側に見える三角形の半島は旧市街で(世界遺産「トプカプ宮殿」、「アヤソフィア博物館」、「スルタンアフメト・モスク(通称、ブルーモスク)」がある。)、北側の新市街との間に切れ込むようにして広がるのが金角湾である。この新旧の市街がイスタンブールの都心部を形成しており、旧市街は三方を海(マルマラ海とボスポラス海峡、そして金角湾)に囲まれた天然の良港で、この自然地勢が数千年の間、敵の攻撃から都市を守ってきた。しかし、時は流れ近年は新市街側において、海峡を跨ぐようにして二つのボスポラス大橋と海底トンネルが整備され、欧亜の地を短時間で結んでいる。

このように東西の陸路と南北の海路が交わる場所に、イスタンブールは位置しており何千年の間、洋の東西の人の交通と南北の物の輸送の要となってきた。地政学的にみると、この地は、その立地の良さを活かし、古代ギリシャの植民都市ビザンチオン(前657頃~330)から発し、ローマそして東ローマ(ビザンチン)の帝国時代は、首都「コンスタンチノーブル(330~1453)」として、また、オスマントルコの時代は、「イスタンブール」として商業・交易の中心をなしてきた。民族や宗教また政治や文化の違いで世界地図が幾ら塗り変わろうと、人や物が行き交う躍動感ある「旅人と商人のまち」としての性格は今も昔も変わらない。



ボスポラス海峡、黒海(上)とマルマラ海(下) 東西、新旧の市街配置 トプカプ宮殿からボスポラス海峡を望む

○多様な気候

イスタンブールの気候は、地中海性気候と温暖湿潤気候のちょうど境界にあたるため、明確に分類することは難しい。市街の北部は黒海からの湿気を受け、比較的高い植生密度を誇り海洋性気候とされるが、市街南部の人口密集地は暖かく湿度の影響を受けにくい。

レヴェント地区では、朝、よく霧が発生するが、霧は、この地ではごくありふれた現象で、市の北側や中心部から離れた場所では、深い霧が出て海峡を含め地域交通を混乱させることがある。夏の最高気温は平均で29℃程度で、雨が降ることは珍しい。冬は冷涼で、最低気温は平均4-5℃である。黒海からの湿気は、冬を迎えると雪へと変わることがよくあり、霧とともに厄介な存在で都市活動を混乱させる。春や秋は穏やかであるが、しばしば雨が降るなど天候は変わり易い、この地の年間降水量は 852 ミリメートル である。

「地方創生」支援プロジェクト



(2)異質な文化の遷移と交錯 悠久な時の流れの刻印を世界遺産や歴史物語として市街の各所にとどめるまち

イスタンブールの起源は、ヨーロッパ側のバルカン半島から移住してきたトラキア人の集落に求められる。しかし、紀元前7世紀頃、現在の旧市街地区に最初に都市をつくったのは、ギリシア人の入植者たちである。彼らが建てた**ビザンティオン**は、旧市街の半島先端に位置し、城壁に囲まれ、こじんまりと佇んでいた。

前6世紀初めに、ペルシアが勢力を拡大し、この地を支配下に置くが、その後、100年間にわたりアテネやスパルタなどとの抗争が続く。しかし、前4世紀後半に登場したアレクサンダー大王の東征により、この地は解放される。その後この地は漁業や海上貿易の基地として栄えるが、前1世紀中頃、ローマがこの地を自国領に編入すると、内乱が起こりまちが破壊されたりするが、コンスタンチヌス一世はこれを収めてしまう。

○帝国の都

そして330年を迎えると、都がローマからこの地へと移され、帝国東方領の首都「**コンスタンティノープル**」として、人口約20万の都市となる。326年建立の**アヤソフィア**大聖堂は、時を経て東方キリスト教世界の中核となっていく。その後、城市は城壁を西に2kmほど移動し、市域を拡張する。この時期、**ヴァレンス水道橋**（378年完成）や**アヤソフィア**（今日のものはギリシア正教の大本山として537年に再建）など、現存する優れた建造物が建設される。

395年にローマ帝国が東西に分裂すると、コンスタンチノープルは、**東ローマ（ビザンティン）帝国の首都**として繁栄を続ける。413年、城壁はさらに西に2kmほど動き、城市の内には壮麗な宮殿と数多くの教会が建ち並び、堅固な城壁と海に囲まれ難攻不落のコンスタンティノープルが完成する。こうして帝都の人口は、5世紀の初めに50万人を数える。



アヤソフィア

ビザンチン帝国の遺跡

オスマントルコの版図

「地方創生」支援プロジェクト



・オスマントルコの隆盛

1453年、千年以上続いたビザンチン帝国が滅び、新たにオスマン帝国が興る。この時、キリスト教教会はモスクへと転用され、アヤソフィア大聖堂のモザイク壁画は、漆喰に塗り込められ姿を消してしまう。また、首都の名も1457年以降は、「**イスタンブール**」と改められる。そしてオスマントルコの進攻に伴い、市の人口は40万人から4万人へと激減してしまうが、これを補うべくギリシャやアルメニア、アラビアなどから、商人など多種多様な人々の移住が促される。ビザンチン側に味方したジェノバの商人も、この地にとどめられる。そうして15世紀も末となると、スペイン系のユダヤ人のほか、中央アジアや西アジアからも商人、職人、学者、文人などの移住者が相次ぎ1470年に僅か7万人だった人口は、1520～1566年の帝国の最盛期、国際貿易の中心地として栄華を極めると、16世紀前半には40万人に、また16世紀中頃には人口50万の大都市に復活、16世紀末には人口も70万人に達する。

こうした人口増の動きに合わせてモスク、バザール（市場）、キャラバン・サライ（隊商宿）、学校、病院などの社会施設が整えられていく。そんな流れの中で、**トプカプ宮殿**(15世紀)、**スレイマニエ・モスク**(16世紀)など、今日につながる優れたオスマン建築が造られていく。



トプカプ宮殿



スレイマニエ・モスク



アヤソフィア内部

17世紀を迎えると、アヤソフィア・モスクと並び称される、「世界で最も美しいモスク」として6本のミナレットと高さ43m直径27.5mものドームをもつ、**スルタンアフメト・モスク**（通称「**ブルー・モスク**」と呼ばれ、その内部はブルーのイズニックタイルやステンドグラスで設えられている。）が建設される。こうして旧市街の丘の上などには、大きなドームとミナレット（尖塔）をもったモスクが林立、イスタンブールのエキゾチックな歴史地区の景観を形成していく。

金角湾右岸に位置するガラタ地区には、ビザンチン帝国の時代より地中海貿易を担うジェノバの商人の居留地があったが、17世紀以降はイギリス、フランスなどヨーロッパ諸国が進出してきて領事館を建設、キリスト教教会も建築され新市街を形成していく。イスタンブールは、オスマン帝国の繁栄に伴い都市化が進み、市街は城壁や海を越えて広がる。19世紀以降は、政府機構も人口稠密な旧市街から新市街へと転出したため、1845年に旧市街と新市街とを結ぶガラタ橋が、金角湾に架けられる。そうしてイスタンブールは、巨大なモスクに代表されるオスマン建築による独特な都市景観の魅力が次第に認識され、時を経て世界中から旅行者を引きつけ一大観光都市へと発展していく。

「地方創生」支援プロジェクト



2. 異国情緒あふれる街 混濁・喧噪・無秩序が醸し出す独特の魅力

イスタンブールの前身、ビザンチン都市・コンスタンチノーブルは、その都市づくりにあたり5世紀のローマを模し、この地を形づくる**七つの丘**（市章のモデルとなる）を利用して、主要な建築物を配置していった。今日、それぞれの丘の上にはモスクが存するが、最も東にあるサライブルヌの丘には、イスタンブールの全貌を見下ろすトプカプ（「大砲と門」を意味）宮殿がある。ここはオスマントルコのスルタン（皇帝）が暮らした場所で、帝国の悠久な繁栄をめざし70haにも及ぶ敷地には、宮殿、庭園、図書館、ハレムなどの施設が築かれた。なお、丘の下は庶民の生活の場となっている。



ブルーモスク



その内部

金角湾を挟む対岸の円錐状の丘に開かれたまちは、地形の影響を受け道は階段状に、また建物は擁壁の助けを借りて建っている。海峡の向かいのアジア側に位置するウスキュダル地区（夕焼け空が美しい）は、丘陵地が海峡沿岸にまでのびている。また、これに続くシェムシパシャやアヤズマの各地区は、地形がさらに急峻でまるで岬のようである。なお、イスタンブールで一番高い丘は、チャムジャの丘で 海拔 288 メートルもある。

（1）市街の構成

現在、都市・イスタンブールの主要な部分はヨーロッパ側にあり、人口の65%、雇用の74%がヨーロッパ側の市街に集中している。イスタンブールは、近代・トルコ共和国の首都ではないが、トルコいやヨーロッパ大陸最大の都市として、文化、交通、経済、学術、観光の中心となっている。

都市イスタンブールは広域都市で、イスタンブール県とは、その区域を共有している。市街は14の地区に分かれ、400を超える教会、礼拝堂が存在する。中心市街は、**コンスタンティノーブルの城市を構成した旧市街**（エミノニュ、ファティフ地区など）のほか、西方にはマルマラ海沿いにゼイティンブルヌ、バクルキョイの各地区が、また金角（きんかく）湾を隔て北に新市街のガラタ、ベイオール、ベシクタシュ、シシュリの各地区が広がる。

金角湾周辺のガラタ地区は娯楽文化の中心で、ベイオール地区には大使館、ホテル、レストラン、店舗などが建ち並び、西欧風の近代的な街並みが形成されている。既成市街には密集地が

「地方創生」支援プロジェクト



広がり、郊外部には新興国の大都市によくみられるように、都市インフラが十分でないまま自然発生的に住宅地が形成されている。一方、アジア側には、新しく開発されたウスキュダルやカドゥキョイなどの地区があり、首都アンカラなどに通じる鉄道のハイダルパシャ駅がある。



エミノニュ港のシルケジ橋



洋の東西を結ぶルート

また、旧市街の金角湾寄りには、最後の大型モスクとして有名なイエニ・ジャーミィ(1663年建設)がある。このモスクは中庭に泉をもち、幾重にも大小の丸いドーム屋根を重ね建っている。モスクの東側にあるのが、最もイスタンブールの街の雰囲気醸す、**エミノニュ広場**である。この広場に立つと、街中の混濁と喧騒そして対岸の町の無秩序さが、いやでも目に耳に入ってくる。雑多な物を売り歩く行商人、それに水売りや鯖サンドの売り子、ヒマワリの種を売る屋台、さらにはチャイ(紅茶)の出前等々、雑踏の中、暫し佇んでいるとミナレットからコーランを詠む声が流れてくる。その間、港の**シルケジ橋**には、沢山のクルーズ船が発着しており、この橋に面しレトロムード漂う、オリент急行の終着駅・シルケジ駅(1888年に建設)がある。

コラム「オリент急行」

シルケジ駅はオリент急行の終着駅で、ここは**スパイ映画「007シリーズ/ロシアより愛をこめて」**でも取りあげられたので、記憶に残っている人も多いだろう。映画には、この駅から出る発車寸前の国際豪華列車に向け、多くの人でごった返す構内を、ものすごい勢いで人垣をかき分け、必死で列車に飛び乗るシーンがあった。いまこのホームに立ってみると、あの日の映画の一シーンが脳裏に甦る。

オリент急行は、欧州大陸の中心・パリを出て、大陸の東西を横断するようにして幾つもの国を通過し、欧州の東端・イスタンブールへと至る夜行急行列車である。パリとイスタンブール間は1889年に運行を開始し、その後、飛行機や自動車などに代替される1977年まで続いた。大陸内部に暮らす欧州人にとって、曇天に煙るパリからみれば、青い空と海が広がるイスタンブールは、旅心も手伝い異質な文化に心解放される別世界で、欧州の王侯貴族や外交官、そして裕福な商人や旅人などの憧れの地となっていた。

そうした欧州人の熱い思いをのせて、まず、アガサ・クリスティーが1934年に推理小説「**オリент急行殺人事件**※」を書いた。また、1663年には「007シリーズ/ロシアより愛をこめて」が上映される。このように小説や映画で取りあげられると、欧州人のイスタンブールへの憧れはなお一層強まった。一時この列車の運行は途絶えたが、近年、また観光用として復活、年に1回ほどだが特別に運行されている。アガサ・

「地方創生」支援プロジェクト



クリスティーが小説を書いたペラパレスホテルは、シルケジ駅の海を渡った対岸のベイオール地区、イスタンブールで一番賑やかなイスティクラル通りを少し西に入った所にあり、小説が書かれた 411 号室は今では記念室となっている。

※「オリエント急行殺人事件」のあらまし

名探偵ポアロがオリエント急行に乗り、帰路を急ぐ車内で起こる殺人事件を描いたもの。その謎解きが大いに話題となった。簡単にあらすじを紹介すると、ポアロが乗ったオリエント急行は季節外れの満席。そして車内でアメリカの富豪の刺殺体が発見される。死体には 12 カ所、ナイフの刺し傷があった。ポアロは同じ車両の一等客室の乗客 12 人に聞き込みを始める。しかし、「誰も怪しい人物」が浮かび上がってこない。それどころか乗客間の話は妙に辻褃が合い過ぎている。そうこの事件の真相は、容疑者 12 人全員が犯人であったというもの。彼らは過去の殺人事件の復讐をするため、この列車に乗り込んでいた。事実が分かった後、ポアロは暫し考え「ここには犯人はいない」と宣言する。



オリエント急行



イスティクラル通り



イスタンブール都心部の歴史地区

(2)エキゾチックな観光商業の地

イスタンブールには、昨今、都市圏人口に迫る数の観光客が訪れており、世界屈指の都市観光の地となっている。それはこの地に、史跡や由緒ある文化的価値高い建造物が多数散りばめられているからである。とりわけ旧市街の歴史地区には、トプカプ、アヤソフィア(現在は博物館)、スルタン・アフメット・モスク (ブルーモスク)、それにスレイマニエ・モスクやヴァレンス水道橋等々、「世界文化遺産」に登録された数々の建造物がある。なかでもアヤソフィアは、かつて東方キリスト教世界の中心で、火災にあい二度焼失したが、その都度、人々の想いを載せ再建されており、高さ 41.5m を誇る巨大ドームは今日も健在である。

また、歴史地区内にあるグランド・バザールは、西欧にはないタイプの商業施設として観光客等に絶大な人気を評している。このバザール、増築を繰り返し、現在 4,000 近い店舗が密集、まるで迷宮のような雰囲気醸している。そのほか旧市街には、考古学、古代オリエントの各博物館、イスラム美術・学術・文化施設が、また新市街にはタクシム広場やイスティクラル博物館、



イスタンブール大学などの学術・文化施設が立地する。さらに、金角湾に架けられたガラタ橋や
アタチュルク橋を渡ると、北側の新市街には、ガラタ塔、ドルマバフチェ宮殿などがある。

この丘の上に建つ、**ガラタ塔**(高さ 67m、円錐形、1348 年建設)の展望室とレストランからは、
金角湾越しに旧市街のトプカプ宮殿やアヤソフィア博物館、ブルーモスク、そしてそれらの向こ
うにマルマラ海やアジアサイドも望まれる。さらに、目を左に転じればボスポラス海峡が伸びる
など、そのパノラマは筆舌に尽くしがたいほどに素晴らしい。このレストランにはステージがあ
って、夜ともなると「**ペリーダンス**(おへそを出し腰をくねらせ踊る)」が演じられ、イスタンブ
ールのエキゾチックな夜を盛り上げている。

長い歴史を背負ったイスタンブールのまちの魅力は、なんといっても大小のドームが重なりミ
ナレットが林立する、モスクの壮麗な景観にある。ボスポラス海峡に行く船の上から眺める丘の
景観は、今も昔も旅人を魅了してやまない。このまちは、そうした**静謐さを醸すモスク**と、人々
の**活気に満ちたバザール**とが共存、その**鮮やかなコントラスト**が旅人の旅情を掻き立てやまな
い。青い空と海そして夕暮れの深紅に染まる空に映える、モスクの**安定感**とバザールの**躍動感**
がミックスした**不思議な魅力**は旅人の脳裏に刻まれ、イスタンブールはいつまでも忘れえぬま
ちとなる。それではイスタンブール観光の代表的な中心商業施設として、世界中から多くの観光
客を集め、土産物探しなどに誰もが訪れる、**グランド・バザール**を紹介しよう。



旧市街から新市街を望む



ヴァレンス水道橋



ガラタ塔

○グランド・バザール

いかにもトルコという**独特の風情(雑踏、混濁、喧噪、無秩序)**を醸す、**異国情緒溢れる屋根
付きの巨大市場(カバル・アカルシュ)**、それが「グランド・バザール」である。この市場は 1455-61
年にかけてメフメット二世の命で建設され、16 世紀に拡張がなされるが、1894 年に大地震に遭
い規模の縮小を余儀なくされる。それでも現在 3 万㎡の規模を有し、その内部には 66 もの通りが
あり一つのまちを形成している。

この市場、現在、全体が**天蓋(ドーム)**で覆われているが、その基となった小規模な二つの市
場は、今日の市場が建設されるおよそ百年ほど前の、ビザンチン時代に既に成立していた。この
グランド・バザールの中心には、イチェ・ペデスタン(市場内市場)といわれる四角い区画がある。
ここはビザンチン時代から市場が置かれていた場所で、これに隣接して新しい市場サンダル・ベ

「地方創生」支援プロジェクト



デスタン(織物や絹などが取引された)が開かれた。そして、これらの市場の周りに順次、小規模な露天商が店を開いていくと、17世紀に入り、これらの市場や露店を覆うようにして、大きな屋根が架けられる。また、その内には通路が配置され、出入り口には門も構えられ、一つの大きな市場を形成するようになる。

グランド・バザール南東部に位置するヌル・オスマニエ門から入ると、東西方向に市場のメイン・ストリートともいえる、広い通路「カルパクチュラル通り」が目飛び込んでくる。この通りを歩いていくと、通路から北の方向にいくつもの細い路地が伸びていることに気づく。このカルパクチュラル通り、実は、この地の尾根部分に位置していて、他の通路は尾根から下のように走っている。従って、道に迷ったなら、どこからでも坂道を上るようにして道を辿っていくと、この尾根道に到達する。そしてさらに東に歩けば、ヌル・オスマニエ門である。

この市場には商品の名を冠した通りやゾーンが多く設定されているが、店舗で実際に売られている物は必ずしもその通りとはなっていない。かつてはそうであったのであろうが、今では比較的そうした商品を売る店が集まっているくらいで、そのほかにもトルコ石などの宝石を筆頭に、貴金属や骨董品、靴や絨毯、また衣類やガラス細工など多種多様なものが販売されている。観光客にとって最もポピュラーなトルコ土産は、目玉柄の平たいガラスのお守り「ナザールボンジュウ」である。とてもリーズナブルなので、あちらこちらで数多く売られている。

この市場、何しろ広い、とても一日で全てを見て回ることはできない。しかし、買い物は楽しい、飽きることはない。疲れたら市場内のカフェやレストランで休息もできる。ここは非日常のハレの場であるから、冷やかし半分に店を覗き、気に留まる物があつたら値段の交渉をし、納得いったら買えばよい。値段の交渉に、ちょっとした緊張感を味わい、そのあと互いの表情・態度の変化を楽しむだけでも時間が過ぎていく。

この地は、東西文明の交差点、南北交易の結節点であり、陸路でアジアとヨーロッパをつなぎ、海路で地中海と黒海を結んでおり、ロシアや北アフリカも含め、様々な文化を背負った人々が行き交う国際都市である。11世紀以降はヴェネチアの商人も移住し、旧市街や金角湾沿いに住みついた。そしてライバル関係にあつたジェノバの商人も、金角湾を挟む対岸のガラタ地区に居を構え互いに競い合った。交易品として、北欧からは琥珀や毛皮、中国方面からは絹、そしてアフリカからはコーヒー豆や香辛料などが入ってきて、市中物はここのバザールで取引された。

「地方創生」支援プロジェクト





グランドバザール

市場を一步外へ出れば、丘の大地を形づくるように、異国情緒溢れるオスマン建築が広がる。これらの建築物のデザインは独特で、14～19 世紀にかけ合理性や幾何学的秩序を重んじ、他のイスラム諸国や西ヨーロッパ諸国の影響を受けない、独自の建築様式を創み出した。その中心的役割を担ったのは、スルタンのお抱えでトルコ至上最高の建築家といわれるミュール・スイナンで、16 世紀にその様式を確立した。スレイマニエ・モスクは、この時代の代表作で完成は 1557 年である。この大規模なモスク建築は、幾重にも重なる安定感あるドームと、天を貫き祈りの時を告げるミナレットから成っている。

一つ一つのオスマン建築には見応えするものが多いが、その一方でオスマンの都市は、戦略上か無秩序に構成されており、一般市街の路地は迷路状に入り組み、街区ごとにモスクが配置されていることもあり、広場の必要性を感じないのか日本同様ほとんどとられていない。

(その 2 へ続く)

参考資料

大島直政 「遠くて近い国トルコ」中公新書 162 中央公論社 1968

那谷敏郎 「イスタンブール案内」平凡社 1980

日本大百科全書(ニッポニカ)の解説 小学館 1994

小田陽一 中公新書「イスタンブールが面白いー東西文明の交流展を歩くー」(株)講談社 1996

井上浩一 世界の歴史 11「ビザンツとスラブ」中央公論社 1998

沖島博美・岩間幸司 旅名人ブックス「イスタンブール・西北トルコ」日経 BP 社 2003(※印の図も)

松村明 大辞林 第三版の解説 小学館 2006

「地方創生」支援プロジェクト



ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説 2010

大村幸弘・永田雄三・内藤正典 「トルコを知るための53章」 明石書店 2012

調査レポート「イスタンブールスタイル」 日本貿易振興機構 2015

<https://www.jetro.go.jp/>

掲載写真等

ボスポラス海峡、黒海(上)とマルマラ海(下) <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

東西、新旧の市街配置 <http://germantokuhain.way-nifty.com/>

アヤソフィア <https://www.jetro.go.jp/>

ビザンチン帝国の遺跡、洋の東西を結ぶルート、グラントバザール、コンスタンチノーブルの包囲網 ※

オスマントルコの版図 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

トプカプ宮殿 <http://www.ab-road.net/CSP/>

スレイマニエ・モスク <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ブルーモスクその内部 <https://retrip.s3.amazonaws.com/>

オリエント急行 <http://www.jtb-grandtours.jp/>

イスティクラル通り <https://www.jetro.go.jp/>

イスタンブール都心部の歴史地区 <http://www.jttk.zaq.ne.jp/>

ボスポラス大橋、マルマライ鉄道 <http://ameblo.jp/>

旧市街から新市街を望む <https://www.jetro.go.jp/>

ヴァレンス橋 <https://zipantravel.com/>

ガラタ塔 <http://123hdwallpapers.com/>

グラントバザール、その内部 <http://tabisuke.arukikata.co.jp/>

トルコ国旗 <http://freesozai.jp/>

マルマライ鉄道 <http://ameblo.jp/>

交通輸送網 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>

トルコの人口構成 2014 <http://www.invest.gov.tr/ja-JP/>

建設工事が進む新空港 <http://tk-jp.blogspot.jp/>

鉄道・道路トンネル <http://synodos.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト

